2　一般動詞（三単現の s）

be 動詞が「存在」であるならば、一般動詞は具体的な行動を表します。これによって後ほど詳しく説明する SVO（主語＋動詞＋目的語）、つまり本章冒頭で述べた、責任の所在や「誰が」「何をやったか」が明確になるのです。

一般動詞と主語の関係で注意しなければならないのは三単現の s です。三単現の s は、主語が三人称、単数、そして現在の時制の場合、動詞に s がつくという法則です。

三人称とは、一人称：I、二人称：you で、それ以外のものを全て三人称といいます。he, she, it などが主語の場合は、それと結びつく動詞には必ず s がつきます。

例▶

He plays tennis.（彼はテニスをする。）

My brother goes to college.（私の兄は大学に行っている。）

It makes me so happy.（そのおかげで私はとても幸せだ。）

では、なぜこの三単現の s が存在するかというと、s というのは「客観性を強調するサイン」だからです。英語は責任の所在を明らかにしたい言語なので、例えば、誰かが学校で窓ガラスを割ったとして、二人がお互いにお前が割ったんだ！と主張しているとします。この時、「私はこれをしていた」「お前が割ったのを見た！」という風に、一人称である「私（I）」がしたこと、言ったこと、二人称である「あなた（you）」がしたこと、言ったことは、いずれも信用に値しません。

しかし、第三者である he や she の証言であれば、当事者でない分、「客観性」が強いのです。だから客観性を示すために「s」をつけます。

そう考えると、「it」の用法も、例えば、「東京から大阪まで３時間かかります。」を英語にした時に

It takes 3 hours to go to Osaka from Tokyo.

（東京から大阪まで３時間かかる。）

なぜ「it」を主語にしているときも s がつくのかが分かります。東京から大阪まで３時間かかるのは、誰にとっても同じで、つまり「客観的である」ということを示すために s がついているのです。

一般動詞の三単現の s で注意しなければならないのは、疑問文の場合です。

先ほどの例文、

It takes 3 hours to go to Osaka from Tokyo.

を疑問文にすると、

Does it take 3 hours to go to Osaka from Tokyo?

となり、疑問を表す do に三単現の s がついて、動詞は原形になります。あくまでも s がつくのは 1 回です。

▼確認問題

以下の文を疑問文にしなさい。

(1) He plays tennis.

(2) My brother goes to college.

(3) It makes me so happy.

▼解　答

(1) Does he play tennis?

(2) Does my brother go to college?

(3) Does it make me so happy?